

ほっとけい会会報

垣間見た大津波の爪痕

東日本大震災被災地の旅

東日本大震災発生からちょうど半年。死者・行方不明者が5千人超に上った宮城県石巻市近郊を「ほっと会」の会員5人が訪れた。多くの市民が避難した日和山公園に上ると、大津波で建物が押し流された市街地が一望できたが、全員があらためて大津波の脅威の爪痕に言葉を失った。被災地で各人が垣間見た東日本大震災の旅行記を特集した。



日和山公園から見た石巻市街地（白い建物は市立病院）

復興に絶望感も

「百聞は一見にしかず」

大震災から半年たっても毎日テレビや新聞で報道される東北の惨状。かつての同僚が取材やボランティアで現場に入った。こっちも行きたい衝動に駆られた。東北はかつての勤務地。青森、宮城の地震取材も経験している。いや、元記者だからではない。この千年に一度という大地震と津波の現場にはだれもが行きたいと思うのでは。「HOT KY（ホットキイ）会」のみんなに提案したら、ほっとけないと思ったのか賛成してくれた。

いつものように久貝介護人の運転するレンタカーで仙台を出発。2年前にカミ

さんと訪れた松島は、当時と同じにぎわいで一安心。だが死者・行方不明約5千8百人を出した石巻市に入ったら様相は一変。テレビ中継に何度も出ていた日和山公園を探していたら、家の1階部分ががらんとしている一角が。津波の跡だった。

日和山に登ると、眼下に惨状が広がっていた。旧北上川の右岸はほとんど建物が残っていない。津波がきたときのテレビ映像を思い出した。川沿いに茶色い、山のような津波が押し寄せ、ここに逃げてきた住民が悲鳴を上げて見詰めていた。

■被災地視察行程（9月11日～13日）

◇1日目 東北新幹線仙台駅（レンタカー）—多賀城市—塩竈市—松島海岸—東松島市—石巻市（昼食、日和山公園）—女川町—（三陸自動車道）—仙台市（ホテル宿泊、居酒屋で懇談）

◇2日目 仙台市ホテル—東北道宮城西IC—飯坂IC—磐梯吾妻スカイライン—浄土平—土湯—磐梯吾妻レークライン—剣ヶ峰（昼食）—五色沼—磐梯山ゴールドライン—猪苗代湖—会津若松市（ホテル宿泊、居酒屋で懇談、カラオケ）

◇3日目 会津若松市ホテル—飯盛山—喜多方市（昼食、ラーメン）—磐越道会津若松IC—郡山IC—郡山駅（東北新幹線）

■「ほっと会会員」参加者

八幡裕隆▽富田信吉▽荻原莞二▽原征▽久貝真澄（年齢順）



日和山公園に立つ一行



女川港岸壁の惨状視察

山を下りて住宅街だったであろう道を行くと、住宅は土台だけ。これもテレビで見覚えがある小学校が忘れられたように残っている。廃校そのものだ。所々で喪服姿の住民が目につく。被災半年でわが家の跡を訪ねてきたのだろう。それにしてもこの人影がほとんどない「死の町」はどこまで続くのだろう。そのま

ちに地震発生時を知らせるサイレンが鳴り響いた。弔報のように聞こえた。弔報のようには聞かされた。女川町では津波の恐ろしいほどの強さを見せつけられた。4階建てや3階建てのビルが尻を見せて見事に

横倒しになっている。周りには地盤沈下であふれた水たまり。驚くのは復旧工事の影さえ見えないこと。

この旅で心残りは放射能汚染地区を回れなかったこと。帰途立ち寄った観光都市・会津若松市には観光客の姿はまばら。老舗の土産屋の主人は「お客さんは今年の1、2割です」とあきらめ顔だった。

「百聞は一見にしかず」の思いを新たにしながら、原発地区を含めて被災地が形だけでも復興するのはいつになるのかを考えると、絶望感が残る旅だった。

（荻原 莞二）